いで記憶が固定されてるか帰ったらやりたいと思ってます）この講座を無駄にしないように努力したいと思います。

鈴木　若葉（2124）

なぜ文学部の中に心理学科があるのだろうとずっと不思議に思っていたが、今日の説明を受けて納得した。心理学とは人の心に関わる学問だと思っていたが以前、大学での模擬講義で〝心理学とは統計学〟ということを知ってからはそうだと疑わなかったし、心理学面白そうだな、と抱いていた淡い期待は粉々になった。私は数学が苦手なのだ。

文学部で哲学などと同じくくりになっていた心理学は、昨今の心理学人気により学部にまでのぼりつめることとなったと聞いた。ではなぜ心理学が科学だと認められるようになったのか。それが刺激を与えた際の行動からその二つをつなぐこころの動き、すなわち〝脳の動き〟に焦点を当てたからだというお話から、それでは脳科学とはどこが違うのだろうと思い当たった。そのちがいは、心理学は脳が動いた結果の〝行動〟にスポットを当てているが、脳科学は脳の動きそのものにスポットを当てているところなのではないかと考えた。

記憶には感覚記憶、短期記憶、長期記憶と三つあり、短期記憶は約七個しか覚えることができないというお話に少しびっくりしつつも納得したが、そのあとの数字を一〇個覚えるという実験でその数字の羅列が電話番号だと分かれば難なく覚えられるという事実にさらに驚いた。確かに私も、電話番号一つくらい覚えるのは造作もない。それどころか三つくらいは、いつ聞かれても完璧に言うことができる。それが、数字を一つ一つの数字としてではなく、四つで一つのまとまり、など無意識に分けて考えているということなのだと知ってとてもびっくりした。電話番号だからとは言え、自分で覚えやすいようにしておくなんて、私の脳は私と違って頭がいい。

だが、次の海馬のお話では、以前本で読んだ、〝海馬は頭が悪いのだ。〟という話が頭をよぎった。海馬は頭が悪いから、記憶を何度も出し入れする（＝アウトプットをくり返す）必要がある、でなければ記憶は定着しない、という内容だった。また睡眠中に記憶が定着するというのも読んだことがあった。勉強をしているといついけずりがちなのは睡眠時間だが、今まで以上に、きちんと睡眠をとることを心がけなければいけないなと思った。そしてちょうど昨日、好きなジャンル（コンテンツ？）のフレグランスジェルを買ったところだった。窓を開けて部屋全体に行き渡るようにしてある。とてもちょうど良いタイミングだった。今日の夜から、そのフレグランスジェルも一緒に寝ようと思う。

次の積極的な忘却（指示性忘却）については、自分も思い当たる節があった。突然テスト範囲が縮まったりすると、なくなった分の範囲まで、テストに出るところ（記憶）に使ってあげなきゃ、と謎の思考がはたらくことがある。また、忘れたいことを忘れられる、というのも良いかも知れないなと思った。先生が仰った通りすべてがそれで解決するわけではないが、消せない記憶に苛まれて死を選んだりなんかするよりも、きれいさっぱり忘れて新しい毎日を送れるようになる方が断然いいのもまた事実たり得るだろうと思う。

知り合いが筑波大学心理学類卒でたぶん行動心理をやっていたようなので（脱走したネズミを素揚げにしたと言っていた）他にききたいものもないしいいかと選んだ心理学だったが、正直とても面白かった。最後の方の先天性副腎過形成の話など、背筋が寒くなった。昨年の生物基礎でホルモンは大切だと学んだが、こんなにも影響がでるものとは思わずびっくりだった。個人的には宗教学を学びたいので心が外部にあると考えることについてもっと知りたいので調べてみようと思う。山田先生、ありがとうございました。

運動が〈できる、うまくなる〉ための原理と方法

筑波大学　体育専門学群　佐野　淳　先生

伊藤　将樹（3205）

私は今回筑波大学の佐野淳先生による「運動が〈できる、うまくなる〉ための原理と方法」についての講座を受けました。この講座を受けて感じたことは、スポーツや競技には効率性や合理性を追求していく上で様々な視点や考え方が多数存在するということです。

具体的にはまず、その競技においてうまくなるとはどのような考え方に基づいているのかということです。スポーツや競技において一番意識することは、全体の一連の動きを常に意識しながら、部分的な練習をつみ重ねることだと佐野先生がおっしゃっていました。初めはフォームも荒削りで安定性に欠ける部分があったとしても、完成形の動きやフォームを意識しながら練習を重ねることで、よりその完成形に近づいていくことができ、そして「最高精形態」の段階までいくことで、自分の中でどのようにしたらより効率的で合理的に動けるのかを研究するようになることを学べました。またパフォーマンスの向上には意識状態、つまりメンタル面も非常に重要性を帯びてくることも改めて学びました。具体的には、「原志向位相」という段階で、その技を習得するためにはコツコツと練習を重ね、ひたむきになっていき、そして「探索位相」で足りないものを研究し始めて、よりその技を習得するために考えるようになり、ある時突然その技ができるようになる「偶発位相」に達します。そこから一度でもできたその技の感覚を忘れる前に何度も反復練習をしようと夢中になり「形態（図式）化位相」に移っていきます。さらにそこからその技を自分のものにし、自分なりのアイデアとイメージでもっと上を研究するようになる「自在位相」に移っていきます。このように人間の中には誰しもが向上心を持っており、自らの目標を達成するために創意工夫をこらしていくことにより、周囲の人から「あの選手は上手だ。」と思われたりすることに接がっていくのだと思いました。私自身もバスケットボール部に所属していて、なおかつ指導者になりたいという目標を持っているため、練習の中でもひたすらその練習をする前に、この練習をする意図や、その練習をするに当たってどのようなことを意識するべきかを考えて取りくんでいます。また、部長という立場でもあるため、他の部員の見本となるようなプレーをできるようにしたいという意識をもち、ひたすらできない技を練習し、さらにそこに自分なりの工夫も加えていくということをしていたので、この講座を受けていて、強く共感することができました。

最後に、この講座を受けたことによって学べた「技術の向上の仕組み」「技術の向上には必要不可欠な意識状態」そして、これらには様々な段階や局面があり、その段階や局面に応じた取り組み方であったり意識の持ち方など、今後の私の指導者になりたいという立場と、大学でも選手としてまだまだ成長したいという、双方の立場においても、とても役に立つ講座でした。この講座を受けたことによって学ぶことができたこれらのことを、どんな形であれ必ず役に立つと思いました。今回はこのような講座を行ってくださった佐野先生にはとても感謝しています。自分も筑波大のような素晴らしい環境で、バスケットや勉学ができるようにこれからも頑張っていきたいと思います。

三戸　広基（3217）

私は将来高校の体育の教員になりたいと考えており、この講義は役に立つと思い受講しました。また、剣道部に所属しており、八月に行われる南九州インターハイの出場を決めていて、福島県代表として全国でも勝ち上がれるように、実力をさらに伸ばすためにはどのような意識の中で稽古に励めば良いのかを学ぶことが目的でもありました。

私がこの講義で印象に残ったことは二つあります。一つ目は、粗形態、精形態、最高精形態の変化についてです。粗形態とは初期状態のことであり、上手ではなく、荒いフォームがでてしまっていることで精形態とは、荒く雑になっていた所が安定化され、経済的（無駄な力を使わない）になり、良い状態で力を出すことができる状態で、最高精形態とは、どんな場面でも最高のパフォーマンスができる状態のことだと学びました。体育などで初めて取り組むスポーツでは、最初はあまり上手にできなくて、そのスポーツの部活動に所属する友人にコツを聞いてから授業をしていくと上達していったことは、これまで何度もありましたが、今日の講義のように、具体的な言葉・説明を聞くことで何をしていくべきなのかをしっかりと理解できました。剣道では、面、小手、胴とあり、試合をたくさんしていき、練習の中で試行錯誤することで、全国という大きな舞台でも、力が出しきれるようになると思いました。だから、その一本のために、何千本、何万本と鍛錬を重ね最高精形態を目指したいと思います。二つ目は「練習する」という行為の大切さです。練習とは、繰り返し反復して学習することであり、技術を身につける行為であり、機械的にただ繰り返すだけでなく、何回かの解決を試みた後で、自分自身あるいは他人からのアドバイスを受け欠点を認め、それを取り除く努力をし、そして新しい事にチャレンジし、常に高い段階をめざすということだと学びました。私も常に意識して取り組んでいるかというとそうではない場面というのは多くあります。先生や仲間からのアドバイスがどれだけ大切であるか、素直な心でしっかりと受け取り、改善に向かうことが大切であるかも改めて知ったので、日々の稽古で常に改善点、目的を持って稽古に取り組みたいと思いました。

今日学んだことを活かしながら稽古に励み大会でも勝てるようにしていきたいと思います。そして将来、教員になった時に、今日のことを教える立場になってしっかりと伝えていきたいと思いました。ありがとうございました。

異文化理解と質的方法
―ことばの研究からみる変わりゆく社会―

筑波大学　国際総合学類　井出里咲子　先生

根本　悠愛（3228）

〝ことば〟というのは、当たり前ですが国々によって異なります。国と国で比べたとき、文化や生活には〝ことば〟が関係することが分かりました。また、スクリーンを通し、実際にAとBに分けるというのは面白いと思いました。その中で日本や韓国・中国は対象物に対し全体的な視野があり、欧米はそのモノだけを見るというはっきりとした文化の違いが見られて面白かったです。また、日本とアメリカの言語スタイルの捉え方や会話のやりとりの相違点がはっきりと見えて、日本では不快だと思うことがアメリカだとジョークと捉えられたり、自己開示で関係性をつないでいくというところで文化の違いが見られたと思いました。

世界が変わりゆくとともにことばも変化をくり返したり、消滅をするのが国際関係や気候変動からだということも分かりました。また、色々なことばや文化を学ぶことで視野が広げられて改めて言語という概念について考えられたと思いました。外国の方の話で親の言語がしゃべれないというのが当たり前というのも日本ではありえないことですが、他の地域だと日常的だというのが、また文化の違いでもあると思いました。私ももし何ヵ国も言語がある国に生まれたとしたら、母語という感覚が無いんだろうなあと思います。そういう生活面で沢山の外国人に聞いてみたいです。

今回の講義を通し、「何でだろう？」という疑問が沢山あり、その答えを知れて良かったです。このような疑問や些細な疑問への探究心や好奇心を大切にして、これからの進路実現へ生かしていきたいです。また、これからの国際関係を広げるためにもことばと文化は必要不可欠なではないかと思います。その国ならではの文化を尊敬しつつ継承していくことが大切であると私は考えます。日本でも約一〇の言語があり、それが消えつつあり、それは日本だけでなく他の国々でも言えることではないでしょうか。私はそれが無くなる前に防げるのであれば積極的に取り組み触れ合っていきたいです。

また、このような講義を筑波大学で普段取り入れているというのが面白いと思うし、外国の方と日本人が同じ場で学ぶというのも、他の文化を知ったり、共有したり、分かちあうための大きな機会だと思いました。意見を交換し合ったりするのもその学科特有の良いところであり、〝強みだと思いました。

私も日常で、グループディスカッションをするときなどは、相手の意見を尊重しつつ自分の意見もはっきりと伝え、「どこが悪い」とか「こういうところ良いんじゃないか」など、良いところ・悪いところの両方を理解できるようになりたいです。私の夢はメッセージ性のある作品をつくり、そこから人々に想いを伝えたいと思っているのですが、今回の講義で学んだ点が多かったと思いました。これらのことは自分の中でしっかり身につけて日常でおおいに役立てていきたいです。今回は本当にありがとうございました。また、お話を聞きたいです。

「言葉と世界はどう関わる？」というテーマでは、東洋人と西洋人の見方や文法などが異なるということは耳にしたことがありましたが、具体的にどのように違うのかを知ることができました。特に驚いたのは、そういうふうに東洋人と西洋人でものの見方などにちがいが出てくるのは習慣や文法からであり、子どものときに何を最初に覚えていくか、というところで変わっていくということです。また、実際に絵を見たときにどう考えるかを周りの人と話し合ってみたときには、違った意見や理由がきけてとても面白かったです。

東洋人と西洋人でこれだけ違うとなると、なぜ習慣や文法などでこれだけのちがいが出てくるのか、もっと知ってみたいなと思いました。

「アメリカ社会のおしゃべり・スモールトーク」では、日本でよく言われる「アメリカンジョーク」について、なぜアメリカ人がそういう会話をするのか→自己開示をしてその場をのりきるためでもある、ということに驚きました。日本人ではそういうことはしないのでより驚きました。以前、気になっていたことがあり、〝アジアのアーティストがアメリカの番組に出たとき、アメリカの司会者がそのグループの名前や読み方をふざけたような感じで間違えたのをアジアのファンがすごく怒っていた〟ということがあり、今回の講座を受け、アメリカではコンビニの例であったように初対面の人に対してもそういうジョークのような言葉を言うことを知り、もしかしたらその司会者はその場をのりきるためであったりなどの理由で言ったのではないかなと考えました。またそこで、その場面を受けアジアのファンが怒った、ということもそういうジョークをかけないアジア人だからこそではないのかと思いました。気になっていたことを自分なりに理解できたとても興味のわいたテーマで、とても面白かったです。

「言語」は地形や人口などたくさんのことに関連しているのだと思いました。赤道付近の国にはとてもたくさんの言語があり、初めて見るような名の言語もありました。日本や韓国のように、同じ共通の言語に統一した方が一つの言語でいろんな人とも共有することができるだろう…と考えた反面、昔から続いてきている言語を大切に残し、継承していくべきだなとも考えました。

家庭内で言語がちがっているというルーマニア出身の先生では、言語の壁などを感じたりしないのかと思いました。私だったら、自分の家族が自分が分からない言語で話していたらとても気になるし、自分の言語で伝わらない分、会話が大変な部分もでてくるのではないかと思います。どのような日常会話をして生活しているのかが気になりました。

人によって言語に対してのとらえ方や考え方がちがう、ということも知ることができました。〝母国語がない〟という方がいるのにも驚いたし、母国語以上に自信のある言語をもつ方もいるということにも驚き、同時にうらやましいとも感じました。

私は今まで「言語というものは〝人が会話するための道具〟というイメージしかなかったけれども、今回の講座をうけ、とても深いものだと思いました。私は将来、たくさんの国の言語や文化などに触れてみたいなと思っているので、とてもよい経験になりました。自分から積極的に問いを見つけ、研究し、たくさんのことを知って将来に生かしていきたいです。

法を学ぶとは何か

新潟大学　法学部　木南　直之　先生

松浦　航太（3135）

まず、木南先生の講義を聞いて印象的に残った言葉は、「法律と無縁な仕事はない」という言葉だ。法曹と呼ばれる裁判官、検察官、弁護士など法を仕事にする職業はもちろん、企業においても労働法など、法律は人と人とのコミュニティの間では必要だということがわかった。大抵の大学では、「リーガルマインドや法的素養を磨く」ことをポリシーとしているそうだが、リーガルマインドや法的素養を磨くことは単に法律を覚えることではないのだそうだ。新潟大学では、「法律をどう解釈し、それにどう適応していくか」ということを重視している。例として、殺人罪の法的解釈の話題があがった。殺人罪には「人を殺した者は…」と示されているが、それでは一体、「人」とは何なのか、クローンや心をもったAI・類人猿・大星人は「人」という枠組みに入るのか、どの基準の「人」を殺してはいけないのか、胎児と人の境目はどこか、など法律一つとっても議論すべきことが多くあるということを知った。ちなみに、刑法の「人」の扱いは大正八年の大審院の判決によって、「母体から体の一部が露出していれば人とみなす」という扱いらしい。しかし、民法では「母体から体全部が露出した時に人とみなす」という扱いで、同じ「人」でも法律によって解釈が異なることにとても驚いた。「人」としての保護を広くすることで、誰にメリット・デメリットが出るかということも考慮して充分に議論する余地があるということだった。

また、「殺す」ということは、殺人なのか傷害致死なのか過失致死なのかということや、車が自動運転をしている際に事故が起きたら、運転している人が罪に問われるのか、整備士なのか、それとも自動運転技術を作った人なのかをまだはっきりと規定はできないのだそうだ。つまり法律は記述が曖昧な分、様々なケースに適用できるように作成されていると思った。

木南先生の言葉でもう一つ印象に残っているのは、「法学はロジックな学問である」という言葉だ。人と人との関わり、交わりがあれば摩擦が生まれるのは当然なことで、法学ではそうした摩擦にどう論理的に対処していくかを研究する。コミュニティや集団内で生きていくためには一定のルールが必要だ。ルールは人と人が関わってできた摩擦を制御するものだが、ルールをどう作り、どう解釈し、どう適用するかを論理的に考えなければならない。ルールは社会を動かすために基本的であり根源的なことだということを身をもって学んだ。

最後に労働法についても講義をしていただいた。「契約の自由」や「労働関係」「労働契約」などをお話しいただき、大学で労働問題について研究したい私にとって、非常に意義のある講義内容だった。前述のとおり、私は大学で労働問題について研究するとともに、将来的にはメディアという立場から自分が得た情報を正確かつ迅速に発信したいと考えている。そのためにもまずは、社会の根源的なことである法律について学習しなければいけないと、今日の講義を聞いて感じた。今後はメディアが発信する法的な内容をスルーせずに一つ一つかみくだいて自分なりに理解していきたい。さらに今日学んだことを活かして高校・大学生活だけでなく社会人になっても法学を研究していけるような人間になりたい。

関根　芽実（2225）

新潟大学法学部が第一志望の大学だったため、今日の講義を聞けるのを楽しみにしていました。法学部は法曹だけでなく、公務員や一般企業など幅広い就職先があるのは知っていましたが、一見、法と関係なさそうな企業にも就職している実体をこの講義で初めて知りました。

講義の感想を一言で言うと、法律は奥が深いと思いました。「人を殺した者」というたったこの言葉だけでも「人」とは何を指すのか、「殺す」とはどういうことか、「者」とは何か、さまざまなことがこの一文から追究できるところが奥が深いと思わせてくれた点です。人と胎児の違いはむずかしいと思った。胎児と人を殺したのでは罪の名前も刑罰も大きく異なり、被害者も加害者の人生を大きくくるわせることになるので、人の範囲、胎児の範囲をきっちり定めておく必要があると思った。

また、法学はひたすら法律を頭にたたき込むかたくるしい学科のイメージを持たれがちですが、そんなことはないと思った。就職して社会に出れば、何かと法にふれることにはなるので、法律を少しでも覚えることは法曹にならなくても大切だと思った。

労働法については、知っていることがいくつかあったが、都道府県ごとに最低賃金が決められていることを初めて知りました。

今日の講義を聞き終えて、元々法学に関心がありましたが、より一層法律の勉強がしたいと思うようになりました。法律に関する知識はまだまだ浅いですが、オープンキャンパスにいって法学をより詳しく理解したいと考えています。国税専門官になるためにも法学を強く志望するきっかけの一つになったと思いました。